

# 千刈狸の呟き

仔狸がもっと幼かった頃は、学校で鼻をたらしたり、咳をしたりしている同級狸が周りにたくさんいたような気がします。仔狸自身も熱を測るわけでもなく、声をガラガラにしながら登校していた記憶があります。インフルエンザの簡易検査が普及する前は、冬季間の高熱を伴った上気道炎症状は特別な名前を付けられることも無く、解熱剤や対症療法をしながら仕事をしていました。今思えば仔狸は4～5年に一度高熱を出して倒れていました。一番ひどかったのは、朝なんとなく不調を感じながら出勤し回診中に卒倒してしまったときでした。血圧は下がり、後付けで熱と咽頭痛が出現しました。今の時代ならばインフルエンザあたりの診断がついたのではないかと思います。その時は自宅療養をしなければならないほど重症でしたが、その後はそのような事態に陥ることはありませんでした。

そのうちにインフルエンザの簡易検査が普及し、診断と抗ウイルス薬処方と自宅療養という整然とした流れが確立され、ワクチン接種とともにインフルエンザのシーズンをうまく乗り切るための術を身に付けてきました。途中で新型インフルエンザやSARS,MARSなどちょっと怖い感染症もありましたが、それなりにコントロールできていたと思います。

今、私たちが悩ませているCOVID-19はどのようなだろうかと考えます。最初は、中国から発生したかもしれないとか生物兵器かもしれないとかいろいろ話が錯綜し、実像がつかめないうちに若い狸や基礎疾患のないような狸も重症化したり亡くなったりする恐ろしい病でした。ウイルスも生き残るために変異しながら感染性を高め拡大していきました。特に最初の頃は、感染経路の追跡のために濃厚接触者の追跡や、クラスターが発生した時の感染源探して辛い思いをした狸達も多かったことも事実です。仔狸が思うのは、初期に日本にもたらされたであろうCOVID-19がクルーズ船だったことが必要以上にCOVID-19感染者の悪者感を強くしたのではないかと思います。クルーズ船はお金と時間に余裕のある狸の楽しみで、一般的な狸にはなかなか手の出しにくいものというイ

## ～ 鼻たれ仔狸 ～

### 仔狸

メージがあります。クルーズ船の乗客（＝お金持ち）からもたらされたCOVID-19が大都市で流行し、狸の流れによって地方にも流行したように感じられます。隣近所が助け合う地方狸の世界が、感染を恐れることでそれぞれ孤立化してしまい、元気な老狸が減ってしまった感じがするのはとても残念なことだと思います。

集まらない、移動しない生活を少しずつ開放し、世の中は日常を取り戻すと言ってはいますが、病院という組織はやはりゼロコロナを目指さなければならぬ部分があり、世間一般との温度差を感じる今日この頃です。COVID-19が5類感染症になってインフルエンザと同じ扱いになったとしても、感染したら一定期間自宅療養が必要となると医療の逼迫は緩和されないだろうと思います。感染しても他に感染させなければ良いくらいの、昔鼻たれ狸が学校に通っていた頃のような大らかさがあればいくぶん気が楽だろうと思います。

最後になりますが、ゼロコロナ政策の継続ができなくなった中国は180度方向転換し、今ではCOVID-19感染歴がないと就職も不利になりました。日本でも感染から回復した狸は高い抗体価を持っているため、一定期間はCOVID-19感染に対して最強な状態です。この3年余で積み重なった多くの犠牲があり、今度はいかに上手にCOVID-19に感染するかが求められる時代になったのかもしれない。ただ、残念なことにCOVID-19は麻疹のように幼い頃に感染したから大丈夫という病ではなく、この先も周期的に狸の世界の流れを停滞させる存在なのだと思います。

「まだ感染していないの？」と尋ねられるほど周りに拡大してしまったこの禍ですが、COVID-19発生当初に感染したために、いろいろな誹謗中傷で苦しんだ狸たちがいたことも忘れてはならないことだと思います。

もうすぐ、送別会や異動のシーズンを控え、仔狸はどのようなスタンスでこの禍と向き合おうか暫し考え中です。